



60

増殖する環境取り組み。アメリカの環境聖都、デンバーとボルダー。

人生の約1.2%をアメリカのミッドランドに身を委ねて過ごした。その間、授業以外で一番力を入れたのは、トランプ大統領の逆風の中で進められている柔軟で強靱な環境取り組みの発見である。アメリカ報告の最終回として、デンバー及びボルダーでの事例を取り上げたい。

デンバーはコロラド州の州都。ボルダーはその北約50キロ、ロッキー大山脈東麓の前衛山地にかかる所にあり、遠くには雪をいただいた主峰群も望める風光明媚な土地である。デンバー都市圏は300万人を擁する。ここらは標高は高いが、一年の300日は晴れ、と言われるほど天候に恵まれ、冬の寒さは過酷ではない。当地への入植はようやく19世紀半ばで、大都市には成長したものの、重工業などは立地せず、自然資源を活かすことが生業となり、それが自然保護の意識を高め、今日の環境都市としての取り組みにつながった。高い自然保護意識を背景に冬季オリンピックを返上した歴史もある。こう説明してくれたのは、デンバー市の持続可能性戦略担当官のリュセロ女史である。同市が力を入れているのが、LRT(ライトレール・トランジット)やBRT(バス・ラピッド・トランジット)などの公営公共交通。LRTは近郊とデンバーを結ぶだけでなく、都心まで乗り入れ、路面電車のように普通の街路を走っている。アメリカでは珍しい、公共交通で移動のできる都市だ。さらに、再生可能エネルギーへのシフト、既存建築物の省エネ改修などが近年の重点政策である。

市のこのような取り組みが、この地で民間の環境取り組みを呼び寄せ、活発にしているように感じた。

ボルダーでは、コーハウジングを訪ねた。応対をしてくださったのは、ニッキー・ハレーさん(写真)。東部で機械エンジニアをし、リタイアした。自家用車の運転に自信がなくなり、車が不要な生活を考えて、公共交通機関が発達した、ここボルダーに移住した。コーハウジングは日本でいえばコーオペラティブ住宅で、かつ、共用部分を広くとって生活の一部を一緒にした共同生活住宅。アメリカだけで数百か所あるが、このものは全国で5件しかない高齢者家族が作ったコーハウジングである。



このもう一つの特徴は、環境対策。建築はコロラド大学ボルダー校出身の人が営む会社が担当し、当初設計から太陽熱温水装置を組み込んだ。共同生活を一番実感できる施設だから、との由。12世帯と共用部分の温水、床暖房の一部が太陽熱で賄われ、追い炊きは不要なくらい十分にお湯が取れるという。この初期投資は、州や市の補助金などもあって、邦貨450万円程度で済んだ。さらにある日、この老人たちの集団に思わぬ入金があり、皆で協議した結果、太陽光発電をすることになった。発電能力は40kW弱で、年間4万kWhくらい発電し、広い共用部分に使っているが、余剰は売却するので、皆が負担する共同生活にかかわる電気代はほぼゼロの由。この設備も、とてもコーハウジングの趣旨にかなった、と満足気であった。

日本では、高齢者は寿命の関係で、投資してもリターンに十分あずかれない可能性があるため、太陽光パネルなど環境設備は避けられることが多いが、このコーハウジングではそうしたためらいはなかったのか、と問うたところ、答えは明快だった。生活を共同化し、資源を共有して、無駄なく、しかし、良質な暮らしを営むことは、コーハウジングの哲学だから、そのための費用であって、必ずしも元が取れなくてもよいし、施設が長持ちして、次の居住者にもメリットを生むなら、次の世代との分かち合いもあってよいと思う、とのことで、頭が下がった。

そして、とても面白いことには、この設計・建築に当たった人も、ここが気に入って、ここに自宅を建て、地中熱ヒートポンプもつけて、かなりネット・ゼロ住宅に近づけた由である。最近、普通の分譲コンドミニアムを建てたのだが、そこには、徹底して環境対策をほどこし、事実上、ネットゼロになっているそうである。

私は、環境取り組みがさらに新たな環境取り組みを引き寄せていること(ポジティブな連鎖)を感じたし、アメリカには、良質な人材が多数居て、その人たちがリタイア後に環境に取り組むことで、さらに環境取り組みが進んでいくものと期待できる、とも思ったのである。



小林 光

元環境事務次官、慶應義塾大学政策・メディア研究科特任教授、博士(工学)、本稿執筆時点には、ノースセン・フルブライト派遣員。